
仮面ライダーディクロスー翼を抱く少女と世界の再生者ー

超団長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディクロス―翼を抱く少女と世界の再生者―

【Nコード】

N2402S

【作者名】

超団長

【あらすじ】

過去に出会った仮面の男。その出会いが少女の運命を変えた。それから数年後、少女の世界に滅びの危機が訪れる。世界を救う為、記憶喪失の少年『影十アキラ』と少女『エミリア』の世界を巡る旅が今、始まる。

プロローグ

その瞬間、世界が一度停止した

目に見えたのは、どす黒い人の血だった。

耳に聞こえたのは、逃げ惑う人達の悲鳴。
殺される人達の断末魔。

あたしの目の前で、人が殺されていく。

あたしを置き去りにしようとした大人達が死んでいく。

人を殺しているのは同じ人ではなく、あたしが今まで見たことのない異形の生物だった。

それも一体や二体ではなく、十体以上はある。

あたしは恐怖でその場から逃げ出すことも出来ず、怪物が無造作に人の命を奪っていく光景を見ていることしか出来なかった。

そして、あたし以外の全ての命を狩り終えた怪物が、最後にあたしの姿を捉え、こちらに歩み寄って来る。

「：ひっ！」

短い悲鳴を上げ、そのまま後ずさろうとする。

しかし、腰が抜け、その場に尻餅をついてしまった。

(い、……いやだ!……こないで、……こないでよっ!)

抵抗を含ませた声をぶつけようとするが、目の前の怪物が放つ一方的な殺意に当てられ、声を出すこともままならない。

そうしているうちに、一步、二歩と怪物が距離を詰めてくる。

(……だ、誰か！)

声を発さない声で助けを求めるも、その願いは微塵に碎かれる。なぜならその場に生きている人間は、自分以外をおいて他にいないのだから。

もう怪物は手の届く距離にまで迫っていた。

怪物は左腕についている鋭い鎌のようなものをあたしに向け、そのまま振り下ろそうとしている。

(あっ………)

眼前に迫ろうとしている刃を見て、あたしは完全に死ぬ覚悟をした。あたしの感覚が世界をスローモーションに捉える。

(……あたし、ここで死ぬんだ)

そう思い始めた瞬間、あたしの目と耳が塞がれた。

しかし、それらを塞いだのは、さっきまで近付いていた死ではなく、

あたしを殺そうとしていた目の前の怪物の爆発だった。

「きゃあっ!？」

突然起こった爆発により、あたしの体は吹き飛ばされ、その場を転がった。

そして、次の瞬間、他の怪物達も次々と悲鳴を上げ、爆発していった。

一瞬、何が起こったのか全く解らなかった。

さっきまであたしの命を奪おうとしていた奴らが次々と消えていく。そいつらは、さっき自分達が殺していた人達と同じ状況に追い込まれていた。

最後の一体が爆発し、後に残ったのは、爆発によって立ち込めた煙と微かな残り火だった。

そして、煙の中から誰かが出て来るのが分かった。

（だ……だれ）

声を発することは叶わず、あたしの意識はそのまま闇の中に沈み込む。

気を失う前にあたしはもう一度、その人の姿を目に焼き付けた。

マゼンタ色に輝く仮面の人の姿を

これがあたしの最初の出会いの物語

第一話 蘇る悪夢十絵かきライダー（前書き）

どうも、超団長です。

初投稿です。

駄文全開ですが、生暖かく見守って下さい。

第一話 蘇る悪夢十絵かきライダー

「……うゝん」

小さい唸り声を上げ、少女『エミリア・パーシバル』は眠っていた意識を少しずつ覚醒させる。

「……またあの夢」

不機嫌そうに瞼を何度か瞬かせて、エミリアは寝起きが最悪の原因である夢の事を思い出す。

これが一度だけならまだしも、最近になって何度も見るようになったので、エミリアは寝起きだというのに疲れた気分となった。

「んしょっと」

気分を切り替える為にエミリアはベッドから身体を起こし、頭を二、三回振った。

金髪のサイドポニーがその反動で、ふわりと揺れる。

「動くな、バカ娘」

突然聞こえてきた声の方向に、エミリアは反射的に顔を向ける。

すると、そこには赤いマフラーと黒のジャンパーを羽織った紺色の髪の少年が居た。

その少年は、足を組んで椅子に座りエミリアが寝ている方を向きながら、手に持っていた小型のスケッチブックに何かを描いていた最中だった。

「……何やってんの？アキラ」

「見てわからないか？ お前のアホな寝顔が余りにも傑作だったんでスケッチしてる。尤も、お前が動いたせいで原形がわからなくなっちゃったけどな」

アキラと呼ばれた少年は、はあとため息をつき急にスケッチをやめ、スケッチブックを懷にしまい込んだ。

「ちよつ、なにそのため息！？ あたしが悪いの？ていうか勝手に寝顔を描かれた、あたしの方が文句言いたいんだけど」

アキラの余りの傍若無人ぶりに、エミリアが捲し立てるが、アキラはどこ吹く風といった感じで受け流していく。

エミリアは、まだ納得いかん！といった感じだったが、アキラのこういう性格はエミリアもよく知っていた為、これ以上の争いは不毛になる前に、エミリアの方から折れた。

「……はあ、もういいわ。それで？ 何か用があって来たんじゃないの？」

まさか、最初からエミリアの寝顔を描くために来た訳じゃないだろうといった感じで、エミリアはアキラから本当の目的を聞こうと促す。

「ん?……ああ、そういえばそうだったな。確か」

「忘れてたの!?’というエミリアのツツコミが入った後に、アキラの通信機が鳴り響く。

アキラはエミリアにも聞こえるように、通信を開いた。

『おい、アキラ! バカ娘呼びにいくのにいつまで掛かってんだ! 仕事何だからとっとと連れて来い! バカ娘にも働かねーんなら問答無用で放り出すって言っとけ!』

通信に出た男『クラウド・ミューラー』は、散々捲くし立てた後、一方的に通信を切った。

「…だそうだ」

「ああ、そうなんだ……じゃないわよ!! 早く起こしてよ!!」

「忘れてたんだ!!」

堂々と言い放つアキラの言葉を皮切りに、また不毛な争いが始まった。

所変わり、アキラとエミリアは現在、仕事の地である惑星『モトウブ』にいた。

あの後、また時間を食った為、キレたクラウドが部屋に乗り込み、

仕事の説明をされた後、半ば強制的にモトウブに送り出されたのだった。

「……まだ何もしてないのにどうしてこんなに疲れてるんだろう？」

「栄養、足りてないんじゃないか？」

隣で呑気に言い放つ、疲れの原因の一人であるパートナーを憎々し気に睨むが、全く意に介していなかった。

エミリアはため息を一つつき、何とか気を取り直して、アキラと共に歩き出した。

仕事の内容は簡単に言うと、人探しである。

最近になって、行方不明者が続出するという事件が巷で発生しており、その内の一人が、ここモトウブで目撃されたという情報が入ってきたので、その調査の依頼が、アキラ達が所属している民間軍事会社『リトルウイング』に舞い込んできたという訳だ。

「……ていうかさー、オッサンもこんな得体の知れない仕事、あたしらだけでやらすかな、普通」

「僕が知るか。文句ならあのヒゲに直接言え」

エミリアの文句に、アキラはぶっきらぼうに返す。

そんないつもの会話を続けながら、二人は行方不明者が目撃されたという熱帯雨林の中へと進んで行く。

歩きながら、エミリアは隣を歩いているパートナーへと、目を向ける。

そこには歩きながら、周りの風景をスケッチしているアキラの姿があった。

彼は時々、こうして気に入った物や、見た事のない物をスケッチする癖があった。

そんなアキラの姿を見ながら、エミリアはアキラがパートナーになった経緯を思い出す。

彼の名は『影十アキラ』

半年前、あるアクシデントがきっかけで民間軍事会社『リトルウィング』に入社したフリーの傭兵である。

そして、アキラのパートナーに、余り仕事に対してやる気がなかったエミリアが選ばれた。

最初こそ、エミリアも物ぐさ気味だったが、アキラと仕事をこなしていく内に少しずつだが、仕事に対してやる気を見せていった。

そして、アキラに対しても、パートナーとして信頼を寄せ、少なからず気にかけていた。

しかし、エミリアがアキラを気にかける理由は、もう一つある。

「ねえ、アキラ」

「何だ？」

「自分の記憶、何か思い出せた？」

「いや、さっぱりだ」

「そう……」

スケッチブックに目を落としながら、エミリアの問いにアキラは答える。

アキラには、一年前からの記憶がない。

自分が何処から来たのか、何者なのかもわからず、唯一わかっているのは、自分の名前だけである。

しかし、それすらも自分の本当の名前かどうか、疑わしかった。

「…ねえ、あの絵また見せてよ」

エミリアがそう言うと、アキラは懷から、今持っているスケッチブックとは別のスケッチブックを出し、「汚すなよ」と言ってから、エミリアにパスする。

エミリアは、それをキャッチするとパラパラとページをめくる。

そのスケッチブックは、アキラがいつも描いている物とは違い、アキラがたまに見る過去の断片を描き出した物らしい。

ページをめくるとそこには、鎧と仮面に身を包んだ戦士が描かれて

いた。

それが、ページごとに一人ずつ描かれている。

一見すると、機械種族である『キャスト』に似ていたが、エミリアは何となくそれとは違う物だと感じた。

そして、最後のページにも仮面の男が描かれていたが、エミリアはその絵を食い入る様に見た。

何故ならそれは、

エミリアにとって出来れば思い出したくない、しかし、どうしても忘れる事が出来ない過去

そして、最近の悪夢にも幾度となく現れる

マゼンタ色の、仮面の男だった。

エミリアは過去に一度、死の危機に頻した事があった。

ある日、突然異形の怪物に襲われ、もう駄目かと思った瞬間、まるでヒーローの様に助けてくれたのが、この仮面の男だったのだ。

それ以来、その怪物がエミリアの前に現れる事はなく、仮面の男も然りだった。

エミリアもその事は、自分の心の中に封印したつもりだったが、ある日、偶然にもアキラの絵の中で仮面の男の姿を見つけ、それから過去の光景を夢で見る様になったのだ。

エミリアは仮面の男の事をアキラに聞いてみたが、本人もわからないらしく、結局アキラと仮面の男は何か関係があるかもしれないという事しか、わからなかった。

（アキラとこの人、一体どんな関係なんだろう）

エミリアが、そう思案に暮れていると

「おい」

と、アキラから声が掛かってきた。

「えっ？ 何？」

「おかしくないか？」

「何が？」

「……静か過ぎる」

アキラは、いつの間にか絵を描くのを止めて、周囲に気を張り巡らせていた。

エミリアもアキラの言葉を聞いて、今の状況にはっと気づく。

もうある程度進んでいるにも関わらず、人は愚か、この世界のモンスターである『原生生物』が一体も出て来ないのだ。

戦闘がないのは、寧ろエミリアにとってありがたい事なのだが、そ

れにしても、この静かさは余りにも不自然だ。

特に、このモトウブは自然環境が厳しく、原生生物の多量発生も珍しくはなかった。

それが一体も出てこないという事に、二人は不気味さを感じていた。その時、

—:::イ:ロ:::ス

「ん？」

突然、誰かの声が聞こえた気がしたアキラは立ち止まった。

声とはいっても、余りにもか細い、頼りない物だったが。

「どうしたの？」

急に立ち止まったアキラを、エミリアは少し不安そうな顔で、覗き込んでくる。

「今、何か聞こえなかったか？」

「えっ？ あたしは何も聞こえなかったけど？」

アキラはエミリアに尋ねてみるが、何の事だかわからないという顔をしている。

アキラも気のせいかと思い、そのまま歩きだそうとするが、

―：ディクロス

「ッ!？」

今度は、ハッキリ聞こえた。

アキラは咄嗟に辺りを見回し、声の出所を探そうとする。

エミリアはアキラの様子に、訳がわからないという感じだった。

「ねえ、さっきから何なのよ？ 一体何……が……、」

エミリアは、アキラにそう言いかけると急に黙り、何かに目が釘付けになった。

アキラはエミリアの様子に気づき、その目線を追い、エミリアと同じ方向を向く。

そこを見ると、上空に銀色のオーロラが出現していた。

「な、何？ あれ」

それは一見すると、幻想的に見えなくもない。

しかし、何処か言い様のない異質さも孕んでいた。

そして次の瞬間、

オーロラから巨大なエイが大量に出現し、空を一瞬で覆いつくした。

「なあ、エミリア」

「……何？」

アキラはエミリアを呼ぶと、その頬をぎゅつと抓る。

「ひぎゃっ！」

「お、痛いのか」

「な、何すんのよ！ いきなり」

「いや、夢でも見てるんじゃないかと」

「あたしで試すな！」

緊張感の欠片もないアキラのボケにエミリアがツツコムと、エイの一体が二人の存在に気づき、突撃をかけようとする。

「っ！ 危ない！！」

アキラは咄嗟にエミリアを引き寄せると、迫ってきたエイを何とか避ける。

「何よ！？ 何なのあれ！！」

「僕が知るか！ とにかく、ここから離れるぞ！」

アキラは動揺するエミリアの腕を掴み、そこから走り出す。

そして、岩場に囲まれた一本道を突き進み、開けた場所まで到達する。

その頃には、空に飛来していた、エイの大群も収まっていた。

「ハアツ、ハアツ」

「ハアツ、ここまで来れば……！？」

二人が安心したのもつかの間であり、今度は正面から先程の銀色のオーロラが迫ってきていた。

「エミリアッ！！」

「きゃっ！！」

アキラは、エミリアを突き飛ばすと、自分も反対方向に飛びのき、オーロラを回避する。

しかし、二人の間をオーロラが壁の様に立ち塞がる。

「アキラ！ 大丈夫？」

「大丈夫って言える状況じゃないな。これ」

オーロラを挟んで、二人はお互いの安否を確認する。

「エミリア」

「えっ？」

突然、後ろからかけられる声に、エミリアは振り向く。

そこには、髭が濃く前髪で目が隠れた男性、ここにはいないはずのクラウチ・ミューラーが立っていた。

「お、オッサン！？ 何でここに？」

思いがけない人物の登場に、エミリアは驚愕するも、クラウチに駆け寄ろうとする。
すると、

「エミリアッ！！ そいつはクラウチじゃない！！」

アキラがそう叫ぶ。その時、クラウチの姿が徐々に変わっていき、緑色の蛹を模した様な怪物に変化した。

更に、その蛹から脱皮するように、姿を赤い毒蜘蛛を模した怪人へと変える。

「……えっ……？」

見知った顔が、突然訳の解らない怪物に変わり、エミリアは一瞬思考がついていけなかったが、

「エミリアッ！ 逃げろ！」

アキラの声に、エミリアは我に帰る。

そして、蜘蛛男から逃れようとするが、

「ギイイイイイイッ！」

その道を遮るように、蜘蛛男と同じ、昆虫を模した怪人が次々と現れる。

「……………」

アキラは怪人の姿を見て、頭の奥底から、何かを浮かび上がらせていた。

人に擬態し、蛹のような体を持ち、脱皮して次の姿へと進化する。

―『ワーム』

アキラは、突然頭に出て来た怪人の名前に、困惑する。

（何だ、これは？ 何故、僕が奴らの名前を知っている？ いや、それだけじゃない。さっきの空飛ぶ化け物も僕は知っている？）

「ああッ！」

突然聞こえてきた悲鳴に、アキラは思考の海に落ちかけた意識を引き戻す。

目線の先には、地面を転がるエミリアがいた。

ワームの攻撃に、咄嗟にロッドを出して受け止めるも、衝撃に耐え切れず、吹き飛ばされたのだ。

そして、ワームはジリジリとエミリアに近付いていく。

「エミリアアッ！ くッ！」

アキラは先程、脳裏を掠めた物を一旦振り払い、壁となっているオーロラを破る為、全力で拳を叩きつける。

しかし、オーロラはビクともせず、水面の様に波紋が広がるだけだった。

「くそっ！」

そのまま、何度も叩き続けるが、オーロラはヒビ一つ入らない。

そうしている間にも、ワームはエミリアに迫っていく。

「エミリアアッ！！」

アキラはエミリアに呼び掛けるが、エミリアは恐怖で体が動かなかった。

何故なら、この状況はエミリアの悪夢、過去の光景と余りにも酷似していたからだ。

あの時は、あの仮面の男が助けに来てくれた。

しかし、同じ事が何度も起こるとは限らない。

何より、今頼るべきパートナーはオーロラによって、締め出されている。

そして、ワームはとうとうエミリアの前に到達する。

そして、その腕をゆっくりと振り上げる。

「い、いや……こないで……」

「エミリアッ！　くそっ！　くそオッ！！」

アキラは諦めずに、オーロラを叩き続けるが、もう間に合わない。

ワームの腕がエミリアに振り下ろされようとした時、エミリアは瞼を閉じる。

（アキラ……助けて…）

その瞬間、

「ギャアアッ！！」

「っ！？」

エミリアから光が放たれ、ワームが弾き飛ばされた。

「……な、何これ？」

突然の事に、エミリアは呆然とし、アキラも拳を止め、その光に目を奪われる。

そして二人だけでなく、ワーム達もその光に釘付けとなっていた。

エミリアは懷に手をやり、光が放たれている物を取り出す。

「これって……」

それは、先程アキラから借りた、スケッチブックだった。

先程から、返すタイミングを逃し、エミリアが持ったままだったのだ。

スケッチブックから放たれる光は、どんどん瞬くなり、やがて光球と化する。

その光球は、エミリアの手元から離れ、アキラの方へと飛んでいく。

そして、オーロラの壁をすり抜け、アキラの元に到達すると光球は更に輝きを増し、アキラの体を包み込んでいった。

（……何、だ？ この光……）

ーデイクロス

突然の光にアキラが戸惑っていると、先程の声が耳に残るくらいに聞こえた。

そして光が晴れると、アキラの腰部にベルトが巻かれていた。

「……これは」

そのベルトは独特のデザインをしていた。

ベルトの中央には、黒が基調の黄色のラインが斜めに入った、正方形のケースが取り付けられており、右側には白の、左側には黒のカメラを模した様な形のバックルが付けられている。

そのベルトを見た時、アキラの心が沸き立っていく。

ようやく、自分にとって大切な物が戻ってきたかのような、そんな感覚が生まれる。

（僕は、このベルトの使い方を知っている……なら！）

アキラは、ベルトの中央のケースの中心に手をかける。

そこには、十字型のハンドルレバーが付いており、それを回すと右側にある射出口から、一枚のカードを射出させる。

アキラは、一回そのカードを覗き込んだ後、右側の白のバックルに装填する。

《KAMEN RIDE》

そして、アキラは引き金となるべき言葉を叫んだ。

「変身！」

《DI CROSS》

その瞬間、少年の姿が変わった。

その姿は、かつて『世界の破壊者』と呼ばれていた男に酷似した姿。
イエローに輝く仮面の戦士。

『仮面ライダーディクロス』の物語が始まる瞬間だった。

第一話 蘇る悪夢十絵かきライダー（後書き）

感想、評価お待ちしております！

第二話 世界の終わり十紅渡

「変身！」

《DICROSS》

ベルトから電子音が発せられた瞬間、アキラを中心に十体の灰色の影が、正面には九枚のプレートが現れる。

影はアキラを中心に回転し、徐々にその身体と重なっていく。

最後に九枚のプレートが、頭部に吸い込まれる様に突き刺さり、身体をイエローに染め上げていく。

変身を完了した後、壁となっていたオーロラはその余波により、粉々に弾け飛んでいた。

「ア：：、キラ：：？」

エミリアは突如変身したアキラの姿を見て、驚愕する。

イエローと黒のツートンカラーに、胸部の二つの十字が繋がったマークの特徴的な鎧。

紫色の複眼と、縦向きに差し込まれた一枚のプレートを中心に、時計回りに四対のプレートが差し込まれた仮面。

アキラも自身の姿を見直し、呆然とする。

しかし、それと同時に胸の内に何かが沸き上がって来るのも感じていた。

―それは、高揚感？ 充実感？

まるで、自分にとって欠けていた物が埋まり、漸く本当の姿に戻れた事に全身が歓喜している、そんな感覚。

ただ、自分でも説明のつかないその何かは、アキラの心と身体を確かに満たしていた。

「グイグイグイグイグイツ！！」

アキラの変身した姿を見たワームは、エミリアよりもアキラを脅威とみなしたのか、己を奮い立たせるように咆哮を上げ、アキラに向かって襲い掛かる。

「ハアッ！！」

しかし、咄嗟に反応したアキラは敵から攻撃が繰り出される前に、カウンターで右ストレートを顔面に叩き込む。

「ギエツ！」

そのまま、ワームの一体を殴り飛ばし、アキラはすかさず、次のワームを迎撃しようとするが、次の瞬間、ワーム達の姿が一斉に消失する。

「何処に………があッ！」

突然消失したワームに困惑した瞬間、アキラの全身を幾つもの衝撃が襲った。

衝撃により、そのまま倒れそうになるが、全身の力をフルに使い、何とか踏み止まる事で体勢を整える。

「ッ……………クロックアップか」

アキラは脳裏に浮かんたある言葉を呟くと、ワームの能力について冷静に分析する。

擬態以外でワームが持つ、もう一つ的能力『クロックアップ』。

この能力を発動したワームは、時空を自在に行動する事ができる状態になり、常人では視認できない程のスピードで行動する事が出来る。

先程の衝撃は、クロックアップで高速化したワームから繰り出された攻撃による物だった。

「雑魚共が、チョロチョロするなッ！」

アキラはそう言い放つと、先程変身した時と同じように、ベルトの中心のレバーを回し、一枚のカードを射出させる。

そして、そのカードをベルトの右側の白のバックルに装填する。

《KAMEN RIDE》

《GATACK》

電子音が発せられると共に、その体は何か覆われるように、別の姿へと徐々に変わっていく。

そして、メタリックブルーの装甲とクワガタ虫を象った仮面に身を包んだ戦士『仮面ライダーガタック』へと変身した。

「姿を見せろ！」

変身を完了したアキラは、すかさず次のカードを取り出し、白のバツクルに装填する。

《ATTACK RIDE》

《CLOCK UP》

カードの力を発動した瞬間、アキラを取り巻く全ての物体、景色がスローモーションへと変わる。

ガタックはワームに対抗する為に作られた、マスクドライダーシステムのライダーの内の一人であり、クロックアップ機能も持っている。

そして、アキラはスローとなった空間の中で、通常通りに動いている生物、ワームの姿を発見し、両肩に装備している一对の曲刀型の武器『ガタックダブルカリバー』を抜き、ワームに向かって突撃する。

「せやっ！」

アキラはワームの一体を斬り裂くと、他のワーム達を流れるような動きで、次々と斬り捨てていき、ワーム達は連鎖的に爆散していく。そして、最後の一体となった蜘蛛型のワームの前に立ち、斬り掛かろうとする。

一方、ワームは精一杯の抵抗を試みるかのように、腕から糸をアキラに向かって放った。

「ふっ！」

しかし、アキラはその攻撃をあらかじめ予想していたかのように姿勢を低くしてかわすと、一気に相手の懐に飛び込み、交差した腕を開くように胴を斬り付け、吹き飛ばす。

「グウウウッ！」

アキラはダブルカリバーを両肩に戻すと、必殺のカードを取り出し、白のバックルに装填する。

《FINAL ATTACK RIDE》

《G A G A G A G A T A C K》

先程とは違う、スクラッチ調の電子音が鳴り、頭部の一对の角から電流のような光が発せられ、滑り降りるように右足に移動していく。

そして、光が右足に収束されると同時にアキラは高く跳躍すると、回し蹴りの体勢を取る。

「ラァッ!!」

エネルギーが集約された右足による強力な飛び回し蹴りは、ワームの頭部に直撃し、アキラはその勢いのまま、ワームに背を向けるように着地する。

「グギャアアアアアアッ!!」

《CLOCK OVER》

クロックアップ解除の音声と共にスローだった空間が通常のスピードへと戻り、蜘蛛型のワームは断末魔を上げ、爆散した。

「……………」

エミリアは今までの光景を見て、呆然としていた。

先程まで自分は、一瞬本気で死を覚悟していた。

目の前には、たった一体でも自分では敵わないであろう化け物の大群。

唯一の頼りのパートナーは、オーロラの壁により阻害され、助けに
来れず、エミリアがたった一人という状況。

この状況で大丈夫だと言えるのは、かなりの大物か実力者だが、エ
ミリアにはそこまでの肝も実力も備わっていない。

しかしそれでも、エミリアは心の何処かで、希望を捨てきれずには
いられなかった。

こんな状況など、ものともせず、きっと最後にはアキラが助けてく
れるという願いにも似た儚い希望。

しかし、その希望はアキラが変身するという思わぬ形となって叶う
事になる。

しかも、その姿は……

（あれは、……あの姿は……）

エミリアの脳裏に、ある光景が浮かび上がる。

「……、おい」

それは、あの惨劇の中で……

「おい、バカ娘。おい」

自分を救い出してくれた……

「もしもし」

仮面の……

「ていつ!」

「ふぎゃっ!」

突然、エミリアの額に”スパァン!!”と叩かれたような衝撃が走る。

額を押さえながら、涙目でエミリアが見上げると、そこにはガタツクから最初に変身した時の姿に戻った、アキラが立っていた。

「漸く気づいたか。全く、僕を無視するとは良い度胸だな」

「ふえ?……えつと、……えつ」

エミリアはまだ、思考が追いついていない感じで、キョトンとしていた。

アキラはそんなエミリアに、やれやれといった感じで、手を差し延べる。

「何が起こったのか解らないって顔してるな。ほら、立てるか?」

「えっ、……う、うん」

最初こそ、奇怪な姿をしたアキラに戸惑ったが、彼から発せられる

聞き慣れた声に幾分か安堵し、おずおずとその手を取り、立ち上る。

「えっと、……ア、アキラ……だよな？」

「他に誰がいる？」

まだ困惑気味のエミリアの問いに、いつも通りの調子で返すアキラ。
エミリアはアキラの姿を改めて見直す。

色は元より、鎧や仮面に若干の違いはあるが、その姿はアキラの絵、そしてエミリアの過去に出て来た、マゼンタ色の仮面の男に酷似していた。

「アキラ、その格好って……」

「僕も詳しい事は解らん。解ってるのはこの姿……ディクロスの名前と能力の使い方だけだ」

「ディクロス？」

「この姿の名前だ。といっても、何でそんな事知ってるのかさえも解ってないんだけどな」

アキラは考え込む様な素振りですと、先程起こった出来事を思い返す。

あの時は、本能の赴くままに闘っていた為、深く考える余裕など無かったが、今になって考えて見れば、何故知りもしない能力をあそ

ここまでスムーズに使える事が出来たのだろうか？

それに能力の事もそうだが、先程の怪人の事もそうだ。

自分はある怪人の事を名前だけではなく、その特性、能力の事も知っていた。

次から次へと沸いて降ってくる疑問に対して考えられるのは、自分の失った記憶に関係しているという事なのだろうが、あれだけの事が起こったにも関わらず、記憶が戻る気配は全く無かった。

謎の知識は開いたが、肝心の記憶は思い出せないという何とも曖昧な感じが、胸の内に不快感を生む。

「まあ、色々疑問は残るだろうが………どうやら、そんな暇はくれないさそうだな」

アキラは何かを察知したように自分の頭上を見上げながら呟く。

エミリアはアキラの様子に首を傾げた、その時……

—グオオオオオアアアアアアアアアアッ！！！！—

「ッ!？」

突然、轟音と言っても差し支えない程の咆哮が周囲全体に響き渡る。突然の咆哮に心臓を鷲づかみにされたエミリアは、反射的にその咆哮の元、上空をアキラと同じ様に見上げる。

するとそこには、先程見た時とは比べものにならない程の数の怪物の群れが飛来していた。

中には、先程のエイ型の大型怪物に加え、蝙蝠型やステンドグラスに覆われた怪物も浮遊しており、更には巨大な蜘蛛や蟹の怪物も崖の岩肌を這うように徘徊していた。

「とりあえず、考えるのは後だ。一旦引き返すぞ」

アキラはそう言うのと、カードを一枚取り出し、今度はベルトの左側にある黒のバックルに装填する。

《MACHINE RIDE》

《MACHINE DICROSSER》

電子音が鳴ると、アキラの隣に一人分が入れる位の大きさの灰色のオーロラが現れる。

オーロラが通り過ぎると、その後から一台のバイクが現れた。

主な配色は黄色と黒。

更に全体的な形状からして、ディクロスを象っている事が解る。

突如現れたバイクにエミリアは驚愕するが、声を発する間もなく襟首を捕まれ、バイクの後部に乗せられる。

「これに乗ってくぞ」

「えっ、ちよつと待っ……キャアアアアアアアッ!!」

有無を言わずバイクを走らせるアキラ。

余りのスピードにエミリアは絶叫を上げるが、アキラは華麗に聞き流し、容赦なくアクセルのグリップを回した。

「おい、そろそろ着くぞ」

「……う、うぷ……」

バイクに乗った二人は、そう時間も掛からない内に二人がこの惑星まで乗って来た宇宙船『マイシップ』が視認出来る場所まで戻って来ていた。

「この程度で音上げたのか？ だらし無いな」

「あ、あんたねえ……おぷ……」

吐き気を催しながら、どこ吹く風のアキラに反抗の目を向けるエミリア。

バイクから発せられる規格外のスピードは生身の人間にはかなりきついものであり、思いっきりその洗礼を浴びたエミリアは、絶賛乗り物酔い中であつた。

「ていうかあんた、人が苦しんでるの知ってたくせにどんどんスピード上げてたでしょ？」

「僕が悪いんじゃないぞ。お前が余りにも情けない顔で僕を笑わせようとするから、スピード上げたくなっちゃうんだろうが」

「あつ、そうなんだ、ゴメン………ってやっぱりわざとかい!？」

絶妙なタイミングで、アキラにノリツツコミをかますエミリア。

余りのツツコミの改心の出来に、エミリアは心の中で小さくガッツポーズをした。

そんなバカ娘の優越感は放っておいて「うっさい、バカ作者!」お前がうっさい、話脱線させるな。

……そんな会話がが続いている内にも、マイシップとの距離は詰められていき、後もう少しという距離にまで近づいてゆく。

しかし、突然アキラはバイクの走行を止める。

「アキラ？」

「……またか」

僅かに苛立ちを含んだ眩きをアキラがもらした瞬間、マイシップとアキラ達の間を遮るように、また灰色のオーロラが出現する。

するとそのオーロラの中から、先程のワームとは違う人型の怪物が大量に溢れ出した。

「シュウウウウウウウウツッ!!」

「ま、また」

「こいつらは……」

その姿は、それぞれが動植物を象った異なる姿をしていながらも、全身が灰色であるという所は共通していた。

その姿を見て、アキラの脳裏にまた謎の知識が浮上する。

それは、視線の先にいる怪物の正体と名前。

人が一度、命を落とす事により生き返るように生まれる、人類の進化形とも言われる、この怪物の名は……

「『オルフェノク』か、全く、次から次へと」

自分の脳裏にある正体の解らない知識に、苛立ちを募らせながらも

アキラは今すべき事を優先させる為、カードを一枚取り出す。

「変身」

《KAMEN RIDE》

《KAIXA》

アキラがカードを白のバックルに装填し、電子音が鳴り響いた瞬間、その身体に黄色の光のラインが駆け巡る。

そして、最後にその身体は光に包まれ、アキラを別の姿へと変える。

銀色の装甲に全身を走る黄色の光のライン。

楕円型の紫色の複眼の中心にX字のラインが走る仮面。

アキラは、変身した者は必ず死ぬとされる呪われたベルトの戦士『仮面ライダーカイザ』へと変身を果たす。

カイザに変身したアキラは更に、カードを取り出し、今度は黒のバックルに装填する。

《MACHINE RIDE》

《SIDE BASSHER》

電子音が鳴ると、今度はアキラ達が乗っているバイクが姿を変えていき、カイザの姿を象った車体にサイドカーが付いたカイザの専用バイク『サイドバッシャー』へと姿を変えた。

「ま、また変わった、バイクも」

「ちょっと揺れるぞ、しっかり捕まってる」

アキラはエミリアが自分の腰にしがみついた事を確認すると、サイドバッシャーを走らせる。

すると、サイドバッシャーは走行しながら変形を初めた。

その姿は表すならば、二足歩行の人型ロボット。

アキラは変形を終えたサイドバッシャーを操縦し、大型の爪が付いた腕を振り上げながら、オルフェノクの群れへと突っ込んでいく。

「オラアッ！」

サイドバッシャーはその巨大な腕でオルフェノク達を薙ぎ払いながら、マイシップに向かってどんどん前進していった。

オルフェノク達も反撃を試みようとするが、サイドバッシャーからのパワーに耐える事が出来ず、その身体は紙のように吹き飛ばされるのみであった。

そして、マイシップの元に到着したアキラはサイドバッシャーからエミリアを降ろす。

「先に乗ってろ！」

「えっ、あんたは？」

「後始末がまだだ。すぐに乗り込む」

「わ、わかった」

エミリアがマイシップに乗り込んだのを確認すると、アキラはサイドバッシャーごとオルフェノク達に向き直る。

「僕からの置き土産だ。全て持っていけっ！」

アキラはそう言い放つと、サイドバッシャーの左腕にある六つの砲門からミサイルを、右腕のバルカン砲からは弾丸を一斉に発射した。

ミサイルは空中で更に分裂し、無数の弾丸と相まって、オルフェノクの元へと降り注ぐ。

破壊の雨は獲物が一体でも逃れる事を許さず、オルフェノク達は爆炎の嵐に巻き込まれ、断末魔と共に跡形も無く散った。

オルフェノクを一掃したアキラはバイクと共に元の姿へと戻る。

「さて、………ん？」

そのままマイシップへと乗り込もうとするが、何か異変を察知したアキラは弾かれたように上空を見上げる。

するとそこには、先程見た大型怪物達が一点の方向に引き寄せられるように集結していた。

アキラは怪物達が寄り集まって何をしているか解らず、怪物達が集

まっている中心をよく目を凝らして見てみる。

すると……

「うっ!?!? あれは……」

そこで行われている行為を見て、アキラは思わず顔をしかめる。

それは一言で言うならば、共食い。

怪物達が互いの身を、引き裂き、引きちぎり、咀嚼している。

その行為は、最初は二、三体間でしか行われていなかったが、怪物達が集まってくにつれて、瞬く間に拡がっていった。

「……あんまり見てて気分の良い物じゃないな」

アキラは怪物達の共食いに不快感を現にして、視線を怪物達から外そうとする。

その時……

「なっ!?!?」

突然の爆音と共に怪物達の中心、共食いをしていた場所から大爆発が起きる。

そこから生まれた爆炎の渦は、どんどん拡大していき、近くにいた怪物達は愚か、周囲の地形さえも飲み込んでいく。

「まずいつ！ エミリアッ！！」

巨大化していく爆炎は、アキラ達の元、マイシップにも近づいてきていた。

アキラはエミリアを救出しようと、マイシップに乗り込もうとするが、時、既に遅く、マイシップは爆炎の中に飲み込まれてしまう。

「エミリッ、……うわあああああああああつ！！！！」

そして、アキラも爆炎へと、その意識と共に飲み込まれた。

「……くっ、ハッ？」

不意に目を覚ましたアキラは、跳びはねるように上半身を起こす。

そして、自分の身体を見直してみると、あれだけ大きな爆発に巻き込まれたというのに、火傷の痕等の異常が全く見当たらなかった。

あの状況の後に、無傷ということの方がよほど異常かもしれないが……

次にアキラは、自分が今いる場所を確認する。

そこは、近くに立派な噴水が設置してある、公園のような場所だった。

少し離れた場所では、巨大な高層ビルがこちらを見下ろすように立ちはだかっており、その更に上の夜空には、黄金の満月が煌々と輝いている。

「一体、どうなって……エミリアッ!？」

明らかに、さっきまで自分がいた場所とは違う事に戸惑っていると、噴水の近くで誰かが倒れている事に気付く。

そこに駆け付けると、それは俯せの状態で倒れているエミリアだった。

「おいつ、バカ娘! おいつ!」

アキラは急いでエミリアを抱き起こしながら、身体の状態を確認する。

身体は、アキラと同じ様に全くの無傷だった。

そして、アキラが何度も呼び掛けていると、やがて、「うーん」と呻きながら意識を取り戻し、アキラはそれに、ほっと安堵の息を漏らす。

「あ、あれ? ここ何処?」

「やっと起きたか。因みに、その質問には答えられん。僕も訳が解らないんだからな」

エミリアは、その場から立ち上がると、アキラと同じ様に周囲を確認して困惑する。

何せ、自分がさっきまでいた場所とは、百八十度違う場所なのだから、しょうがない。

「あの世って感じでもなさそうだな。まあ、詳しくは……」

アキラはそう言いかけると、徐に噴水の影に目を向ける。

そして……

「そこにいる奴にでも聞いてみるか？」

と言い放つ。

すると、その声に反応する様に誰かが影から姿を現す。

「気づいていたんですか？ 油断なりませんね。まあ、どちらにせよ出てくるつもりでしたけどね」

その人影は、高くも低くもない静かな声で言葉を放つと、アキラ達に向かって静かに歩いてくる。

その姿は、最初は辺りが暗い事もあって、よく見えなかったが、こちらに近づいてくるにつれ、月明かりに照らされ、その姿は顕わになる。

そして出て来たのは、茶髪に端正な顔立ちの青年。

青年はアキラに視線を向け、その顔に穏やかな微笑みを交えて……

「始めまして。ディクロス」

と静かな声で挨拶をした。

第二話 世界の終わり十紅渡（後書き）

大幅に更新が遅れました。

楽しみにしていた人、ゴメンなさい。

決して、他の人達の小説を読んでいて遅れた訳ではありません。（
ほ、ホントだよ。・・・半分）

こんな駄作者ですが、これからもよろしくお願いします。

次回、多分半分くらい説明回。

主人公&ライダー設定（前書き）

現時点での設定です。

主人公&ライダー設定

名前 影十アキラ<かげとあきら>

年齢 不明（外見は16・17歳）

身長 168cm

体重 58kg

性別 男

髪型 紺色で、後ろ髪が肩に着くか、着かないかぐらいの長さ。

瞳の色 海色

主人公。記憶喪失であり、自分の事については、名前以外覚えていない。

気に入った物や、見た事のない物をスケッチする趣味がある。

超人的な身体能力と怪力が備わっており、PSP2の世界では武器を持たず、素手で戦っていた。

また、どんなに有害なエネルギーでも通用しないという特異体質を持つ。

性格は、基本的に傍若無人で自己中心的だが、仲間に対しては素直じゃないながらも、大切に思っているツンデレ。かなりの大食い体質で、美味しい物に目がない。

仮面ライダーディクロス

身長 190 cm

体重 80 kg

パンチ力 10 t

キック力 16 t

ジャンプ力 一飛び40 m

走力 100 mを3, 5秒

ファイナルアタックライド…ディメンションキック 60 t

アキラが変身する仮面ライダー。

基本カラーはイエロー。

複眼の色は紫。

デザインは基本的にディケイドと似ているが、頭部のプレートが九枚になっており、中心の一枚のプレート以外は縦向きではなく、複眼の形に沿うように横向きになっている。

また、ディケイドの胸の十字のラインが左右両方にあり、胸の中心で繋がっている。（コンプリートフォームのヒストリーオーナメントがない感じ）

平成シリーズのサブライダー全てに変身、又は召喚することが出来る。

ちなみに、メインライダーのカードは最初の時点では持っていない。他にも、『アタックライド』や『フォームライド』に加え、ライダー

ー以外のキャラを召喚する『サポートライド』、各ライダーのマシンを召喚する『マシンライド』等が使える。

ツール

デイクロスロット

デイクロスの変身アイテム。

普段はバツクルの状態で携帯できる。

形状は、長方形で中心に十字型のレバーが在り、右側にカードの射出口がある。

レバーを回すことで様々な効果を持ったカードを射出させられる。色は黒を下地に、斜めにイエローのラインが入っている。

各ライダーに変身・召喚する為に必要なエネルギーを異空間から供給する機能を持つ。

ライトドライバー

ベルトの右側に付属しているカード発動機。

デザインは白のデイクイドライバー（ただし、中心にライダーの紋章がない）。

カメンライド時は変身の発動を行い、アタックライド、フォームライドの発動の役目を担う。

ダークドライバー

ベルトの左側に位置するカード発動機。

デザインは黒のデイクイドライバー（ライトドライバーと同じくライダーの紋章がない）。

カメンライド時は召喚の発動を行い、サポートライド、マシンライドの発動の役目を担う。

専用マシン

マシンデイクロッサー

デイクロスの専用バイク。

配色は、デイクロスと同じイエロー。

デザインはデイクロスの仮面などを模している。

ベースの車体は、ホンダXR230。

性能的にはマシンデイクライダーとほぼ同じだが、デイクロスが乗る事により、デイクロスからもエネルギーが供給され、デイクライダーの二倍の出力とスピードを発揮する。

また、マシンライドのバイク召喚において、媒介の役目を担う。

主人公&ライダー設定（後書き）

他にも設定ありますが、とりあえず、これだけ載せておきます。

第三話 旅の始まり十新たな世界（前書き）

今回、一部自己解釈入ってます。
中意してお読み下さい。

それから、大幅に遅れてすいませんでした！！！！！！！

第三話 旅の始まり十新たなる世界

「初めまして、デイクロス。そして、エミリア・パーシバルさん」

アキラ達の前まで歩いてきた青年は、顔に穏やかな微笑を浮かべてアキラ達にそう言った。

エミリアは青年が自分の名前を知っていた事に驚き、アキラは青年から発せられた、デイクロスという言葉に、目を細めて青年を睨む。

「……なるほど、あの時、僕にしつこく呼び掛けてたのはお前か」

モトウブで散策していた時、アキラの頭の中に何度も響いてきた声。

それは不思議にも、目の前の青年の声と一致していた。

更にデイクロスという言葉。

どのような方法で伝えてきたのかは解らないが、あの声がこの青年の物だということは、何となく解った。

「あの時って、あんたが何か聞こえるって言ってた時？」

「ああ、どういう仕組みかは解らんが、あの時の声も、僕達が此処にいるのも、全部コイツの仕業みたいだ。一体何物だ？ お前」

アキラがそう問うと、青年は相も変わらず、笑みを絶やさないうまま、口を開く。

「僕の名は…そうですね、とりあえず、『紅渡』と名乗っておきます。貴方と同じ、仮面ライダーですよ。デイクロス」

「仮面、ライダー？」

「……………」

エミリアは、青年『紅渡』から発せられた聞き慣れない単語に首を傾げるが、アキラは不思議とそれを初めて聞いた気がしなかった。

それどころか、その言葉を聞くと懐かしさだけではなく、敵意さえも沸いてくる。

何故なのか、理由は解らない。

ただ理屈ではなく、本能が己にそうだと訴えかける。

無言で顔をしかめていると、エミリアが心配になったのか、アキラに声をかける。

「ちょっと、どうしたの？ 大丈夫？」

「…大丈夫だ。紅渡とか言ったな。お前は僕の事を何か知っているのか？」

「…：貴方の記憶に関しては、残念ですが、今はお答えする事は出来ません」

「今は？ どういう事だ？」

「言った通りの意味です。それに今は、貴方達に伝えなくてはならない事があります」

「…………舐めてるのか？」

勿体つける様な紅渡の返答に、アキラは苛立ちを隠しきれない。

今にも、飛び掛かりそうな様子のアキラをエミリアは、急いで宥める。

「ちよっ、ちよっと、落ち着いてよ！」

「…………ちっ」

アキラはまだ何か言いたげだったが、エミリアの制止で、渋々、矛を収めた。

エミリアはアキラの怒りが再燃しない内に、紅渡に話の続きを促す。

「ええと…………、それで、伝えたい事って？」

「はい。はつきり言いましょう。エミリアさん、貴女の世界は…………」

紅渡が一拍置くと、先程までの表情とは一変、穏やかな笑顔から、笑みが消えた引き締まった表情となり…………

「……もうすぐ終わりを迎えます」

……と、予想だにしない一言を放った。

「……え?……」

紅渡からの思いもよらない発言に、エミリアは一瞬何を言われたのか解らず、茫然となる。

だが、すぐに我に帰り、エミリアは紅渡に食ってかかる様に問いたです。

「な、何よそれ!? どういう事!？」

「それを今から説明します。ではまず、これを見て下さい」

紅渡が空に人差し指を向けると、空の風景が急激に変わってゆく。

すると、背景は闇のままに幾つ物、惑星のような物体が現れる。

その光景は、さながら宇宙の様だった。

「な、なにあれ? 星?」

「あの星は一つの独立した世界。それぞれが独自の歴史、物語を持

った世界です。エミリアさん、貴女の世界もあの中に含まれていません」

紅渡の言葉にエミリアは驚愕する。

宇宙にまで広がる自分の世界が、無数にあるあんなに小さな星の一つでしかないという事に。

「信じられないのも無理はありません。ですが、事実です。この世界とは、違う歴史を歩んだ世界は幾つもあります。……そうですね。異世界と言った方が解りやすいでしょうか？」

「異世界、……本当にそんなのが……」

エミリアは、信じられないといった様子で呟くが、異世界という言葉に強い興味を抱く。

エミリアの世界、グラールでは、『亜空間理論』と呼ばれるある理論が提唱されていた。

その理論というのは、亜空間と呼ばれる未知の空間を介する事で、あらゆる世界、則ち、異世界へと道を繋ぐ事が出来るというものののだが、理論は成り立っていても、実際、異世界というものを見た事がない一部の者達にとっては、正直眉唾的な話であり、エミリアも自分の目で見えるまでは、信じきれなかったが、自分が今居る場所の異質さを考えれば、いやでも目の前に居る青年の言葉に信憑性を持つてしまう。

また、エミリアはたまに自分の理論を唐突にぶちかます程の研究意欲を持っており、異世界が存在するという事実は、彼女のその意欲

を刺激するには十分だった。

「そんな細かい話は、どうでもいい。とつとつ、話を進めろ」

少し言葉に苛立ちを含ませながら、アキラは話の先を促した。

「そうですね。では、話を戻しましょう。先程も言った通り、それぞれの世界は様々な歴史、物語を歩んでいます。これらの物語は、問題なく進んでいました。しかし……」

紅渡が一旦言葉を区切り、視線を空に戻す。

アキラ達はその視線を追うと、宇宙で漂っている幾つかの星の周りに、黒いもやの様な物が出現していた。

「ある日、幾つかの世界の物語に狂いが生じました。その狂いはどんどん大きくなり、やがて、世界の歪みとなって世界を蝕み始めたのです」

紅渡の言葉を表すかの様に、星の周りに出現していた黒いもやはどんどん大きくなり、最終的に星全体を包み込んでいった。

「歪みが生じた世界はどうなる？」

「歪みが生まれた世界は、本来ならその世界にとって有り得ない事象を引き起こし、それらは世界を大きく狂わせ、やがて消滅に至らしめます。ウィルスの様にね」

星を包み込んでいた黒いもやは、やがて掻き消える様に晴れていき、その中に在るはずの星は、まるで、もやが食い尽くしたかの様に、

跡形もなく消えていた。

「なるほど。つまり、この世界も歪みが生じた世界のひとつということか」

「そんな……っ！ オッサンは！？ オッサン達は無事なの！？」

一瞬、愕然としかけたエミリアだったが、ここにはいない仲間達が脳裏を掠める。

先程、突然現れた怪物の軍団、恐らくあれこそが、世界の歪みの一端なのだろう。

あんなものが世界のあちらこちらに現れているのならば、彼らが無事だという保障は何処にもない。

いきり立った様子で、エミリアは紅渡に彼らの安否を確かめる。

「今の所、彼らは無事です。世界の崩壊は”僕と仲間達”が一時的に食い止めていますから。ただ、それも長くは持ちません。こうしている間にも、世界の崩壊は少しずつ迫っています」

紅渡の言葉に、エミリアは安堵しかけるが、すぐにその表情に陰を落とす。

時計の針が二度と戻らない様に、世界の終わりはもう決まっていると宣告された様なものなのだから。

「何故、狂いが出た？ 何か原因が有るはずだろう？」

「その通りです。これらの世界の狂いの原因、それは『ディケイド』が関係しています」

「：ディ、ケイド……っ!？」

紅渡の『ディケイド』という言葉に、アキラは頭の奥底がズキリと疼くを感じた。

まただ。先程『仮面ライダー』という名前を聞いた時と同じ感覚。

いや、今度は圧倒的に敵意の方が大きい。

まるで、親の仇の名前を聞いたかの様などす黒い感情が、沸き立っていくのを感じる。

アキラはその感情を表情には出さず、何とか平静を装っていると、エミリアがディケイドについて聞いていた。

「ディケイドって？」

「かつて、世界の破壊者と言われていた仮面ライダーです。エミリアさん、覚えはありませんか？ 貴女は数年前に彼に会っているはずですよ」

紅渡にそう言われ、エミリアは首を傾げるが、すぐに脳裏にある光景がフラッシュバックされる。

それは闇の中で血に濡れる人々。

押し寄せる怪人。

それらに怯える自分。

そして、その中で颯爽と現れるマゼンタ色の仮面の男。

「ま、まさか、あの人が？」

「はい。ディケイドは貴女の世界に一度訪れています。しかし、それを境に全ての世界から姿を消しました。能力の欠片を残して……」

紅渡が言葉を区切ると、上空の星の更に上で、星よりも二倍程の大きさのマゼンタ色の光の球体が出現する。

そして、球体が一際、光を放ったかと思うと、破裂する様に弾け、光の粒となって無数にある星の内の幾つかに降り注ぐ。

光を浴びた星には、先程の星と同じ様に黒いもやが出現した。

「つまり、その欠片とやらが歪みの原因って事か？」

「はい。何故、ディケイドが姿を消したのかは解りません。しかし、世界に散らばった欠片には確かにディケイドの力が籠められています。それで、ここからが本題なのですが……」

そう言うのと、紅渡はまっすぐにアキラ達を見据え、口を開く。

「貴方達には、これから世界を巡り、ディケイドの欠片を回収してほしいんです」

「えっ!?!」

「……やっぱりな」

紅渡の言葉にエミリアは驚愕するが、アキラは話の流れから、その言葉を予想していたのか、差して驚いた様子もなく、眩きを漏らす。しかし、腑に落ちない事もあった為、アキラは紅渡に質問する。

「何故、僕達に頼む？ 自分達でやればいいだろう？ 仲間がいるんならな」

アキラは先程の紅渡の”仲間達”という発言を聞き逃さなかった。

仮面ライダーという物が何なのか、詳しくは知らない。

しかし、先程の自分の姿を思い返すに、戦う力を持った戦士だという事は分かる。

紅渡もその一人であり、しかも、仲間がいるというのであれば、記憶喪失の不安定な奴に頼むより、自分達でやった方が確実なのではないかと、アキラは思った。

「理由は二つあります。まず一つ目は、僕達他のライダーは各世界の崩壊を食い止めている為、満足に動く事が出来ません。その中で今の所、世界を自由に動けるライダーは唯一人……」

「それが僕って訳か？」

「はい。そして二つ目は、エミリアさん、貴女が既に欠片を一つ持

っているからです」

「えっ！？ あたしが？」

そう言われると、エミリアは自分の身体をまさぐる様にして確かめる。

しかし、エミリアにはそんな物を手に入れた記憶など全くなかった。

「正確に言えば、欠片は貴女の身体の中に宿っています。彼のライダーとしての能力を目覚めさせたのも貴女の中に眠る欠片の力です」

紅渡のその言葉にアキラは、エミリアがワームに襲われ、光を発した時の事を思い出す。

あの時一瞬だけだが、彼女が金色に光る紋様のような物を纏っていたかのように見えた。

「もしや、あれが欠片なのだろうか？」

「欠片同士は互いに引き寄せ合います。貴女の中にある欠片は他の欠片の場所まで導いてくれるはずです。……逆を言えば、歪みが濃くなった貴女の世界に欠片を抱えたまま留まるのは危険です」

「この世界に居続ければ、歪みは更に濃くなり、世界の崩壊は加速する……ってところか？」

「……はい。気の毒ですが」

その言葉を聞いて、エミリアは落ち込んだように俯く。

紅渡の言葉は、言い方こそ柔らかかったが、遠回しに『世界が消滅する前に出ていけ』と言われている様なものである。

しかし、正論でもあるため、反論出来ない。

納得もし辛いが……。

「とにかく、時間は余り残されていません。崩壊を食い止めているとはいっても完全ではありませんから」

「どちらにせよ、今の僕達に居場所はないって事か。……全く、面倒くさい事に……」

アキラは苛立だしげに呟き、エミリアは俯いたまま逡巡していた。

正直、この青年の言っている事がどこまで本当の事なのか分からない。

何せ、先程から突拍子もない事ばかりの言葉の連続で、そう簡単に信じろと言われる方が無茶だった。

極めつけは、何やら世界の命運の決断まで迫られる始末。

もう全て、夢だと割り切ってしまいたかったが、先程、体験した出来事による戦慄や恐怖が本能に現実＜リアル＞であるという事を認めさせられてしまった。

頭の中で色々な物が渦巻き、どうすればいいのかすらも分からないエミリア。

その時……

「……えっ？」

エミリアの頭にポンと手を乗せられた感触。

その手は最初は優しげに頭に置かれたが、その直後、エミリアの頭を振り回すように乱暴に撫でる。

「うわわっ！　ア、アキラ？」

漸く、撫で回していた手から解放され、エミリアは目を回しながら、手の持ち主、アキラを見る。

「うじうじすんな」

「えっ？」

「どうせまた、一人でごちゃごちゃ考えて、訳分かんなくなってるんだろ？　解りやすいな、お前は」

若干呆れた様な面持ちで、アキラはため息を漏らす。

しかし、その表情に嫌みの色はない。

アキラは、その海色の瞳で、エミリアの目をしっかり見据えながら、

「大丈夫だ」

と、僅かに笑みを浮かべながら言い放ち、言葉が続ける。

「お前がどんな場所に居たとしても、僕はお前の傍に居てやる。今までだってそうしてきたし、……それに、その……それがパートナー……でもんだろ？」

話している途中、アキラは照れ臭くなったのか、若干言いにくそうに言葉を紡ぎだす。

その様子を見て、エミリアは可笑しくなり、ついぷつと吹き出してしまう。

相変わらず、粗雑で横柄な態度と言葉。

けれども、その言葉に嘘偽りはない。

いつも、気ままで自分勝手だけれど、その決して仲間を裏切らない行動にエミリアはいつも助けられ、その姿に憧れさえ抱いた。

いつか、ちゃんとしたパートナーとして、隣に立ちたいと思える程に。

そのパートナーが自分の傍に居てくれると言ってくれる。

いつしか、エミリアの胸の内に渦巻いていた不安は幾分か和らいでいた。

そして、その気持ちのままエミリアは、紅渡に視線を向け、言葉を切り出す。

「その、欠片つてのを集めたら皆は、……世界は助かるの？」

「ええ。滅びの原因さえ取り除けば、後は世界の力で破損した部分が修復されるはずです」

「……わかった」

紅渡の返答を聞いて、エミリアの瞳に、段々光が籠っていく。その光は決意の光。

「世界の終わりって言われても、まだあんまり実感出来てないし、全部は信じきれないけど、……それでも大変な事が起きてるっていうのは、あたしにも解るし、何とかしなきゃいけないってのも解る。だから……」

戸惑いはある。不安もない訳じゃない。

今までの仕事で行った場所とは違う、未知の世界へと行く事になるのだ。

けれど、それでも……

「だから、あたしに出来る事があるなら、……こんなあたしにも出来る事があるなら、あたしは自分に出来る事をやる。正直、怖くないって言ったら嘘になるけど、このまま何もしないであたしの大切な人達が、場所が無くなるなんて嫌だから」

まだ自分にどれ程の事が出来るのかは、まだ分からない。

だが、今まで自分の傍に居てくれた大切な人達や、過ごしてきた場

所を見捨てるなんて出来ない。出来るはずがない。

エミリアは決意の籠った眼差しを携えながら、紅渡にそう言うと、不意にアキラへと視線を向け……

「それに、あんたもいるなら大丈夫！でしょ？」

……と言って、満面の笑顔を見せる。

それに対して、アキラは一瞬、呆氣に取られた表情になるが、すぐに不敵に微笑んで「当然だ」と返した。

「引き受けてくれるのですね？」

「ああ。まだ、記憶の事とか、聞きたい事は沢山あるがな。どうせ、今は教えてくれないんだろ？ そのかわり、全てが終わったら洗いざらい話して貰うからな」

「分かりました。では……」

紅渡がパチンと指を鳴らすと、先程まで上空に映し出されていた宇宙のような景色が消え、それと同時に、アキラ達の背後にもう何度も見た灰色のオーロラのカーテンが出現する。

「これは……」

「最初に欠片がある世界に繋がる道を作っておきました。後は先程も言った通り、欠片を集めていけば、欠片同士が引き合い、次の世界に繋がる道が自動的に作られるはずです」

「そうか。なら、話しは早い、とつとと終わらせるか。行くぞ、エミリア」

「あつ、待ってよ！」

オーロラの向こうに存在するのは、今だどんな所か予測がつかぬ異世界。

一度足を踏み入れれば、もう後戻りは出来ない。

それにも係わらず、全く臆することなく、オーロラに向かって歩を進ませるアキラ。

相変わらずのマイペースさだが、今はそのスタンスがこの上なく頼もしいと思いながら、エミリアはアキラに遅れてついていった。

―例え未知の世界でも、アキラと一緒になら何だって乗り越えられる。

本当にそう思うのだ。

やがて、二人はオーロラをくぐり抜け、その瞬間……

―世界を……

不意に聞こえてきた、その微かな声と共に二人の視界が真っ白に埋め尽くされていく。

そして、最後に……

―世界を頼みます。

紅渡のその言葉と共に、二人の意識は白い闇の中に沈んだ。

ゆっくりと意識が浮上するのを感じ、エミリアは真っ暗な視界の中、目を覚ます。

しかし、それは今居る場所が暗いのではなく、自分が瞼を閉じているだけだと気づく。

つまり、この瞼を開ければ、目に飛び込むのは別の世界の光景ということになる。

確かに最初は不安の方が強かったが、異世界という所がどんな所かやはり、それなりに興味が出てくる。

不安と興味が入り混じった複雑な感情を抱き、エミリアは瞼を開けた。

すると、そこには……

「っ！？」

「……………」

エミリアは眼前に広がる光景に、目を見開く。

隣を見てみると、アキラも目の前の光景を怪訝な顔で見ていた。

何故なら、そこに在るのは……

「ここが……別の世界か」

圧倒的なまでに、全てを破壊されつくした荒野だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402s/>

仮面ライダーディクロスー翼を抱く少女と世界の再生者ー

2011年10月29日15時14分発行